



第十六卷 第三號

(通卷第六十三號)

昭和六年七月發行

研 究

コツスートの政治思想

時野谷 常三郎

昭和二年十一月余は匈牙利の首府ブダペストに至つて、暫し足を此處に留め、羅馬時代以降今日に至るまで數多く殘存する史蹟遺物を探れ歩いた。同國は過ぐる世界大戰の結果として奥匈二元帝國より分離して別に一箇の獨立國を形成したものの、西に東に南に、北に其の領域を削り取られ、國民の憤激痛憤は今や其の頂に達してゐる。

ドナウ河畔に壯觀を誇れる匈牙利議事堂の側には一八四八―四九年雄々しくも獨立の旗を翻へして暴虐な奥國の壓制に抵抗を試みた、彼の熱血の志士コツスートの偉大なる記念石像が新しくも打ち立てられた。余の同地を訪れた際には、つひ數日前に其の除幕の式が行はれたとか云ひ、うち供へられた數多き花輪の裡にも、復活を庶幾するマジャール族の強き民族精神の現はれを掬ふことが出来たのである。

記念の像に詣でての歸るさ、ドナウ河畔のとある古書店を獵りて Ludwig Kosuth, Dictator von Ungarn als Staatsmann und Kämpfer なる小冊子を得た。書は一八四九年獨逸マンハイムの地に於て印刷に附せられたもの、彼れコツスートが企畫悉く頼れて奥露兩軍の爲に祖國を奪はれ、暗涙を吞んで土耳其に亡命せる其の當時の發刊に係る。卷頭コツスートの略傳を載せ、次に彼の盛

コツスートの政治思想 (時野谷)

第十六卷 第三號 三四一

名を博するに至れる五大演説の全文を掲ぐる。

其の後、バルカンの周遊月餘に亙りて再び獨都伯林の客となり、ライプティヒ街の古書店に計らずも、コッスートの同志にして獨立の戦役に參加し屢々填軍を破つて勇名を轟かし、軍敗れて後、奔竄遠く英京ロンドンに亡命せるクラプカ將軍の回想録

「Aus meinen Erinnerungen von Georg Klapka」(一八八七年チューリヒ出版)を得た。

前書「Ludwig Kossuth」(一八四九年マンハイム出版)も勿論匈文からの獨逸譯であるが、一八四九年代にかゝる匈牙利關係の文獻が數多く獨逸で出版されたといふのは、當時獨逸の統一未だ成らず、聯邦各國何れもみな反動の政治に困み、匈牙利の獨立運動にも自づと同情を持つに至つた結果であるのはクラプカ回想録の序文の中にも明言してゐるところである。

尙ほ後書「クラプカ」回想録は一八八七年の出版であるが、獨逸統一の成立後、忽然として、獨逸の親匈的態度が衰へたので、其の親匈主義の復活を計らうとの意圖から、クラプカ自ら、もとか、れた匈文のものを獨譯し、之を世に問ふに至つたのであるとは同回想録の序文の中にも明記してゐる。

さて其の後余は英京倫敦に遊び、古書店の中にて同じくコッスートに關係ある *Memories of my Exile by Louis Kossuth* (Translated from the original Hungarian by Ferenc Jausz) の一卷を得たが、こほもと一八七九年匈文を以て書かれたのを一八八〇年に英譯せられてロンドン方面で印行せられたのである。一時コッスート崇拜が英國で可なり盛んであつたのに併せ考ふれば、寔に無理ならぬ次第である。

今、余は偶然にも三都に於て入手するを得た是等三箇の文獻を基礎とし、他書に併せ考へ、聊かこの小篇を物して遙かにマツヤールの雄傑を偲ぶ所以である。

(1) Aus meinen Erinnerungen v. G. Klapka. Vorwort.

(2) Ditto.

一、十九世紀の指導的理念

十九世紀の指導的理念の一つとして理想主義を數ふべきは蓋し何人も異存無きところであらう。此の理想主義に胚胎せる民族愛重の精神に、同じく當代を指導せる自由主義の精神が結合して所謂民族自由主義なる時代の精神を生むに至つた。しかして此の民族自由主義に統合 (Unification) と分離 (Disintegration) の兩面を有することは、ハインショアの「十九世紀のヨーロッパ」に述べられて居り、更にまたゲルヰヌスの十九世紀史緒論に於ても明快に論議せられてゐる。

かゝる民族自由主義は彼れマジャールの國、匈牙利にも影響せずには措かなかつた。

蓋し匈牙利を構成せる主要民族はマジャール族であつて、黄色人種のウラル・アルタイ系なるフィン・ウグリッス (Finno-Ugric) 族に屬する。紀元九百年の交ドニープルの河岸を出でて西方に轉じ、カルパチヤ山脈の西南部ドナウ河畔の平原に其の居をトし、九九六年以降一三〇一年の交に互つてアルバード家 (Family of Arpads) の公、王に依つて統治せられ、徐ろに文化圏内に其の歩を進むることになつた。良がて十五世紀に至つて異民族たる奥のハプスブルグ家に併合せられ、其の面積及び人口に於ても、殆ど後の二元帝國の半ばを占むやうな状態になり、その經濟的の資源より見るも、匈牙利の奥國にとつての至寶たることは、英國の印度に於けるが如きものありとさへ言はるるに至つたのである。

さて其の後匈牙利は久しく奥國に合併され、同國とは Personal Union の關係に依つて、等しくハプスブルグ家の君主を國王に戴いてゐたのであるが、其の政府及び議會は獨立であつて、番、軍事、

外交・財政の三大権のみが奥國政府の指令を仰ぐことになつてゐた。

しかも此の間奥國の匈牙利に對するは、概して其の強壓的の政略を以て之れに臨み、マジヤール族の自由を抑制することが甚しく、茲に十九世紀初頭より全歐に遍蔓せる民族自由主義の感化を受け、所謂「不自然なる結合」を分離して、眞の民族的國家を造り、自由の治を娛まんとするに至つた。

彼れコッスートとは實に此かる時代の精神に育まれ、自らその精神の指導者として活躍せるものなるが、彼れの所期せるところは、果して當初よりして此の分離的民族自由主義に立脚せるものなるや、以下少しくその歸趨に於て闡明するところが無ければならぬ。

次に民族主義の旺盛なる時代に於て幸ひに所期の民族的國家を建設せるものを見るに、其の何れもの場合、必ずや國內に異民族たる小數の種族を包容せざるは無い。蓋し國家として其の存立を保ち、其の發展を希ふ以上、必ずや政治的、軍事的將た經濟的の必要條件を顧慮せねばならぬのであつて、是等を顧みる以上勢ひ他民族の居住地の一部を奪つて、之を自國に併合せんとするが如き傾向を生ずる。蓋し事情寔に止む可らざるの趨勢といふことが出来る。しかも、之が取扱に於ては極めて慎重なる考慮を要するものであつて、その處理に於て當を得ずんば、却つて意外の危機を胚胎することがあるのである。

試みに之をシレスウイヒ・ホルスタインの問題に徴せんか。一八六六年普は奥と戦つてシレスウイヒ・

ホルスタインの兩州を得たが、其のシレスウイヒの北部たる所謂北シレスウイヒに於ては、デンマルク人とドイツ人との兩種族を包含し、プラウグ條約の一項に同地の所屬を其の人民の投票に依つて決定すべき旨明記せらるるにも係はらず、普若くは後の獨逸は何等其の約束を履行するに至らずして、遂には此の條文を廢棄に終らしめ、終始民族的の紛争を繰返して、遂に世界大戰當時の決裁に俟たねばならぬ事になつたのは今尙、吾人の耳目に新たなるところで、畢竟するに獨逸が種々なる政治的軍事的將た經濟的考慮から敢へて國際間の信義を無視するの餘儀無きに立ち至つたのである。

果然、十九世紀前半期の匈牙利に於ても此の小數民族に對する處置の重大なるを見出すのである。中にも其の主要小數民族たるクロアチヤ人 (Croats) (スラヴ系) の問題は匈牙利に取つて絶大なる影響を及ぼし、これに對する處置の要諦を誤まれる結果は、遂に匈國の破綻を生むにも至つたのである。民族自由主義の第一線に立つて活動せる彼れコツストは當時果して此の小數民族に對する如何なる畫策を有したるか。彼れの政治的思想を検討するには必ずや此の問題を忽諸に附すべきでは無いのである。

(1) Hearnshaw: An Outline Sketch of the Political History of Europe in the Nineteenth Century. p. 71.

(2) G. G. Gervinus: Einleitung in die Geschichte des neunzehnten Jahrhunderts. S. 156.

(3) The American Historical Review. Vol. XXIV (1919) p. 227—p. 252.

二、マイジャール民族の國民的特質

カルパチヤ山脈の西南ドナウ河畔の平原、即ち今日の匈牙利の地は、マジヤール民族の定住せる以前、幾度か諸民族の襲來を受け、東西諸種族の交渉地點たるが如き觀を呈してゐる。

即ちこれを史に徴するにアガチルス人 (Agathyrsen) トラキヤ人 (Thakier) ケルト人、バンノニヤ人 (pannonier) 羅馬人、ゴート人、サルマート人 (Sarmaten) フン人、ゲビード人、ランゴバルド人、アヅアール人、スラヅ人、フランク人等交るべく來つて此の地を襲ひ、其の或る者は單に此の地を通過するのみにて殆ど其の根柢を探ぬるに由無きものもある。蓋し是等諸族の多くは遊牧的の性質を帶び、或は奪掠攻伐を以て能事了れりと考ふるものから、更に或は背後よりして他の種族の壓迫を感じ、或は東西諸種族の連絡路たる此の匈牙利は概ね常に一定民族の定住を見るに至らずして止んだものであらう。但だ羅馬時代には北方慄悍の蕃族に當らず必要上今日のブダ・ペストの附近にムニキピウム即ち形式上獨立自治の服屬市たるアクインクム (Aquincum) を置き此處に軍團^{レジオン}を配置したのは有名なことであつて、今日發掘の遺蹟に徴して之^①を見るべく、轉ろに往時の盛觀を偲ぶる許である。

良がて既述の如く紀元九百年の交、黄色人種なるウラル・アルタイ系のマジヤールは東方ドニール^②の河畔を去つて、此處今日の所謂匈牙利の地に至つた。この當時襲來せるマジヤール族が輕騎兵の集團を中心とせる侵掠攻伐の軍旅、さながらのものであつたのはハインリヒ・マルスアリ博士の説話や

フゲツシエン^③の「匈牙利國民の政治的發展」に於て之を見ることが出来る。

從てマジヤール族は甘んじてドナウ河畔の此の大平原に定住するを好まず、更に鋒を轉じて西方東フランク方面を侵したが、九五五年オトー一世の爲め、アウグスブルグの大敗を招き、爾後鋒を收めてドナウの平原に退き此處に永住の覺悟を定めたのは前のフゲツシエンの著述に、「アウグスブルグの戰に依つてマジヤールの侵寇は終を告げた。：：數多き州には何れも要塞的陣營が起され、是等各州の長官はみな世襲であり、遂には王政の建設を見るに至つた。」と記されてゐる。而して王政の基を開いたのは、實にアルバード家其の者であつたのである。

即ち是れに依つて推定すれば、アウグスブルグの戰爭後、王政的傾向が、漸く歴然と顯はれ來つたものゝ様である。さて劫掠移動の一民族にして、一處定住の王國を峙立せる以上、必ずや其處に農工商特に農業の發展を見るに至りしことは疑無かる可く、フゲツシエン^⑤の著述に自由・非自由の農民階級さては商工の階級までが創設され、非自由の農民や工人階級は概ね優勝民族マジヤールの來住前よりの土著の民にして、商人階級はマジヤールの定住後、新に他國より移住せる人民に依つて始めて構成された旨を記してゐる。更に新來の優勢なマジヤール族と舊來土著の民の間にも自らなる融合混和の行はれたのは當然であり、此の場合、舊土著の民の一躍して自由的地主即ち貴族の階級に進んだ者もあると記してゐる。マジヤール族にして既に王政主義的農業國家を形づくれる以上、必ずや其處に保守

主義の傾向を生むに至りしなるべく、アルバード王家よりアンジュエー家、リュクセンブール家を經てハプスブルク家の統治に至るまで、常に王家推戴の舊習に安んじ、種々民族的の不幸にも係はらず、聊か漸進的の進運を娛んだものであらう。

次にマジヤール族はアルバード王家の統治を受くるに至つてより、ハプスブルク家の制馭を蒙るやうになつたまで、常に外敵の壓迫に固められ、換言すればトルコ民族とドイツ民族との間に立つて不斷の抑壓に民族的の不幸を痛切に體驗した。

かくてマジヤール族の國民性は次第に偏執的に、嫉視的となり、一轉しては排他的の傾向をさへ帶ぶるに至つた。この事は余が研究の主要文献たる既述の三著述の中にも窺はるゝのであるが、余が直接匈牙利人に接して體檢せるところに依れば斯かる傾向は實に想像以上である。

余がブダペストの市立博物館を訪れて、コッスートの遺物を觀覽せる折、館長は懇切に余を導き、^⑥「我等マジヤールは古往今來實に幾百年、常に歐人の迫害に苦んだ。我等は何等歐洲の天地に同胞を有せぬ。番々困みつゝ、悲みつゝ今日に及んだ。」と。聲涙共に降るの概があつた。余は實に余の説話を交へた他の二三の名士に就いても全然同じきやうの感想を得たのである。歴史にして過去の事實と現實の生との作用的關聯に重きを置く以上、現實を以て過去を推すも強ち不當な事ではあるまい。

更にマジヤールの國民性につきて注意すべきは、彼等の性向が著しく多血的、熱情的なるにある。彼

のビスマルクも其の回想録の第二卷に於てマジャール人の性向を舒し、*die Vollblütige Magyaren* なる語句を用ひてゐるが、現在の匈國民の性狀を以て過去を推すも、同じき斷案を得ることが出来る。

かくも多血的、情熱的の性向に富めるものから、マジャール人は著しく信仰的精神にも富めるものがある。紀元十一世紀の初頭アルバード家の聖ステファンが、始めて人民を基督教に改宗せしめた功により、法王ジルヴェスター二世によつて王冠を加へられたことは有名な傳説であり、今尙ほ、ブダの王宮の壁畫にも此の思想が描かれてある。しかし此の傳説には異論を挿むものも尠なく無く、フゲッシエンの第一卷には聖ステファンの父ゲーサ(Géza)こそ傳道の事業に一段の功績を認めらるゝものゝやうであり、僧正ピリグリン(Pilgrim)の如きは既に十世紀の後半期に一舉して五千の改宗者を洗禮せしめと述べてゐる。マジャール族の信仰的に熾烈なる感情を有するは、之を以ても其の一斑を推すことが出来やう。

多血的に且つ信仰的に熱烈なるものから、不正を忌み、且つ精悍義に勇むことは宛として東洋系の特色を顯はすのである。この一事は後章に説述するクラブカ將軍とイタリヤの志士マツヂニとの會談に就いて見るべく、クラブカがマジャールの習風は詐術を退けて正々の戦を主張するにありと論じたことでも了かる。

如上マジャールの國民性の特質を擧げ、聊か之を論證するに至つたのであるが、かゝる零圍氣に養

はれたコミニストの性格、將たその政治的思想の果して如何なるものなりしやを見るは蓋し次章の目的とするところである。

- (1) Dr. Bálint Kuzinszky: *Asinicum, a description of excavations* p. 6—7.
- (2) Heinrich Marczali: *Die Geschichte Ungarns*. S. 1.
- (3) Knatchbull-Hungessen: *The Political Evolution of the Hungarian Nation*. Vol. 1. p. 10.
- (4) Ditto. p. 10—11.
- (5) Ditto. p. 17.
- (6) 拙著 歐洲史蹟 三二六頁
- (7) *Gedanken und Erinnerungen v. Otto Fürst v. Bismarck*. Zier. Bd. S. 294.
- (8) K. Hugessen: *The Political Evolution of the Hungarian Nation*. Vol. 1. p. 11.
- (9) *Aus meinen Erinnerungen v. Georg Klapp*. S. 218—219.

三、コミニストの政治的思想 其の一

ルドウイヒ・コミニスト (Ludwig Kosuth, Louis Kosuth, Lajos Kosuth) は十九世紀の初頭、一代の雄傑彼れナポレオン一世が歐洲大陸に濶歩して塙國は百方其の防禦に腐心しつゝありし時、一八〇二年を以て匈牙利の北部ゼムプリン (Zemplin) 州なるモンク (Monok) と稱する一寒村に生れた。其の父アンドレアス・コミニスト並に其の妻は共に匈牙利の小貴族^①の階級に屬し、スロヅアツク種族 (スラヴ系) の出身 (Slovakische Abstammung) に係かるものやうである。

前章に、舊來土著の民の、優勝種族たるマジャール族と融合混和を行へる際、舊土著民の一躍して自主的地主即ち貴族の階級に進んだものもあると述べて置いたが、田舎貴族たるアンドレアス・コッストは凡らくは、此かる階級の後裔に屬せしものなるべし。

果して然らばルドウイヒ・コッストの系統には當然マジャール族の血を混ぜしものなるべく、假令また比較的純潔にスロヴァツクの血を傳へたりとするも永きに涉つて匈牙利の地に住し、且つ匈牙利的教育を受けしに於ては愈々以てマジャールの性の傾向を帯びざるを得ぬ譯合である。事實ルドウイヒ・コッストは其の幼時、若き新教の牧師より教育を受け、年長じてゼムブリン州のカルツイン派の教會學校に入り、法律の研究に一身を委ねたので、其のマジャールの教養を得たことは何等疑無き處であらう。

かくてコッストは今や自ら純然たるマジャールとして立ち、人も亦、此くの如く信じたことは疑が無い。一八四八年クロアチヤとの戦が方に起らうとした折、コッストはマジャールの奮起を促し、「神よ我が國土、我がマジャールの祖國を守れ……」〔*Erhalte Gott unser Land, unser magyarisches Vaterland……*〕の神聖な歌を高唱せよと激勵するあたり、方に彼れのマジャール族的氣質をいと完全に表白してゐると云ふことが出来る。

事實かくの如くんば前章に述べたやうなマジャールの國民性は確に彼れの性状を陶冶し、彼れの政

治的思想の動因を形づくつたものであらねばならぬ。

以下少しく是等兩者の關係を闡明し、且つ本論の初頭に述べた十九世紀の時代精神たる民族自由主義が、如何にコッスートの政治思想に影響を及ぼせるやにつき若干の考察を試みやうと考ふるのである。

抑もマジヤール族の民族的精神の特徴たる多血性にして熱情的なことは彼れコッスートに於て、最も明かなる表現を見、彼れの議會に於ける演説には常に火の如き熱誠を伴ひ、懸河の辯と相俟つて、説き去り、説き來り、聽者を魅せざれば止まぬと云ふやうな盛んな勢があつた。コッスートの始めて匈牙利議會に出で政治的の活躍を開始したのは實に一八三二年のことであるが、爾後、革新黨の名士として活躍し一八四三年には遂にコッスート等一派の努力に依り、從來議會の用語たりし、拉典語が廢止され、昂聲熱辯に適應するマジヤール語を以て之に代ふるを許されたので、匈牙利の議會には前後に比類無き、幾多知名の雄辯家を輩出さするに至つたが、中にもコッスートの辯舌は議會第一流のものとして一般の賞讃に値するものであつた。

中にも一八四八年七月十一日コッスートがバッチャニー (Bathyanyi, Ludwig) 内閣の藏相として匈牙利議會の壇上に試みた演説は熱誠の調、滔々の辯、コッスート一代の名演説と曰はる。當時一面にはクロアチヤ匈國の擧兵あり、セルビヤ匈國の蜂起があり、一面には陰險な奥國の壓迫があり、これ

に對して斷然たるマジャールの奮起を促せるものが此の演説であつて、コッスートは叫んだ。

(上略)『かくて危険は大なる故、詳述せば愈々其の大いさを加へ來らんとする危険が我が祖國の地平線上に集まり來らんとするが故、取り分け吾人は是れが危険を除去せんが爲め、吾人自らの中に力を求めねばならぬ。

自己の中に充分なる活力を持つところの彼の國民のみ存ふことが出来るであらう。自己の力に依れるに非ずして單に他の力の援助に依てのみ自存を計らんとするところの者は、何等の將來をも有するに非ず、夫故此際余は諸君に要請する。大なる決心を以て立てと。(中略)

更に國民は若し出來得べくんば、名譽に充ちたる、しかも光輝に充ちたる平和を整へんため、將た又、勝利に充ちたる戰を達成せんが爲めのかゝる重大な決意を實現せんが爲め、兵力を二十萬に増加するの權能を政府に與ふべく、差當り、四萬の兵を配置し得べき權能を政府に許すべきである。……尙ほ二十萬の軍備を用意し、之れを武裝し、之を維持するには年四千二百萬ゲルデンの費用を要すべきである。(下略)『云々

と。熱烈な論調は容易に盡るべくも無かつたのである。が、時方にコッスートは病中のことでもあり二時間に垂んとする慷慨的演説の爲めに疲勞困憊の極遂には壇上に仆れて一語をも發し得ざるに至つた。この時ニャリー(Nyáry)なる議員は突如立上つて、右手を昂めて誓をなし、莊重な語調を以て「我々は誓つて所要の資金を供給しやう。」と叫んだので、凡ゆる議員は限り無き昂奮に満たされ、各々自席に立上り、嵐の捲起れる如く、一齊に「我々は誓つて所要の資金を供給せん」と叫ぶに至つた。茲にコッスートは再び壇上に立上つて演説を續くるに至つたのである。多血的にして熱誠我れを忘るるマ

ジャール族さてはコッスートの面目が躍如して眼前に髣髴たるを覺ゆるのである。

次にマジヤール人の特質として著しく信仰的精神に富めるは前已に述べた通であるが、コッスートに於ても其の感化影響の極めて切實なるを見るのである。前にも述べた如く彼れは其の青年時代、カルザイン派の教會學校で法律學の教育を受けたのであるが、従てカルザイン主義の信仰にも相當の崇信を有してゐたものと推定せらるゝ。獨りコッスートと言はず、一體に匈牙利の小貴族共は大抵カルザイン派を崇拜して、可なり嚴肅な信仰を有してゐたと言ふことがトライチケの十九世紀獨逸史にも記されてゐるので大體上コッスートの信仰的方面をも想像することが出来るのである。加之十九世紀を風靡せる理想主義の流れは此處匈牙利をも撼かして、その信仰的方面をも高潮せしに於ては、この事は後段で説明する。愈々以てコッスートの信仰そのものに、何等かの影響ありしを肯定せねばならぬのである。

宜なるかな、コッスートの一八四八年九月三十日、クロアチヤ人の侵入に對してマジヤールの奮起を促すの檄文は熱誠な民族愛護の精神に加ふるに熾烈なるカルザイン派の信仰の閃きを示してゐる。

曰く。

『^①聽け。愛國の輩よ。永遠の神は、個々の奇蹟に表顯することなし。却つて普遍的の法則に於て表顯する。自らを見棄つるところのものは神に依つて見棄てらるとは、神の永遠の法則である。』

自らを助くるところのものは、又神に依つて助けらるとは永遠の法則である。

偽誓夫れ自體が其の終局に於て罰せらるゝは神の法則である。

偽誓の爲に、得た又不正の爲に奉仕せんとするところのものが、却て正義の勝利を馴致するのは、神の法則である。云々。

更にコッスートの放浪回想録序文に、一八四九年獨立の軍敗れて、トルコに亡命するところを序し、

『余は方に國境を踏み超えんとし、余が郷國の地上に打臥して歎歎しつゝ、子の愛をもて大地に接吻を與へた。

余は土の一塊を執つた。一步は前にと置かれた。余は難波の船の浪にもまれて、嵐の響諸共に荒涼たる海岸に打寄せられたのにも、さも似て居る。……土耳其の參謀は心嬉しくも余を導いて、余の爲に用意されたる場所に

と案内した。其の夜は神の太空の下に、心行く許り憩ふことが出来たのである。』

流離艱難の間にも、浩洋たる神の慈悲にひたらんとする、亡命志士の心境も眞に一掬の涙無きを得ぬのである。

更にコッスートが、マジヤール人の習風を體して、不正を忌み、詐謀を退け、正々の去就を主張してゐたことは、次のクラブカ回想録の傳ふところに依つても間接に推想することが出来る。

回想録の傳ふところは、コッスートの同志、クラブカ將軍が流離亡命の際、一八五〇年偶々、英京ロンドンに至つて、イタリヤの志士マツジニに會見した時の話である。會談の砌、マツジニは、

「余は歐洲の革命協會 (ein europäisches Revolutionscomité) を造り、之に就いてはコッスートと協

調の態度を執らうとする。尙ほコッスートが亡命の境遇より還れる後、彼れをして該協會に入會せしむるを取計らふべし。……………我々伊太利人は、正々の戦を好めども、又我々の祖先の武器たる短刀を用ふることをも辭せぬ。——之を以て惡むべき羈絆を脱せんとする以上は。——余は信ずる。コッスートも必ずや吾人の目的に参加するに至るべきを云々。」と云ふてゐる。之に對してクラブカは、「特に我々匈牙利人は世界に於ける最も非革命的の國民 (das allerwenigst revolutionäre Volk der Welt) である。吾人はナイフや短刀を使用することを知らぬ。却て我が國の自由の爲、正々の戦に於て、(im offenen Kampfe) 身命を抛たうとする。」余は信ずる。コッスートも亦、吾輩と其の見解を一にせん云々。」かくの如く答へてゐる。

しかし事實、其の後、歐洲の革命協會はマツジニの盡力に依つてロンドンに造られた。最初之に加盟したのは伊太利、佛蘭西、獨逸、ルーマニヤの代表者であつたが、後にはコッスートもマツジニの勧誘黙止し難く、逡巡しつゝも (zähdend) 遂に之に参加した。

併し其の後、マツジニと嫌隙を構へて此の協會を脱して了つたのは世間周知の事實である。

即ちコッスートはマジャーナル特有の精神に依り、さてはカルズイン派的正義觀念に依り陰險詐謀を斥けて正道を辿り、其の目的に到達しようと努めたものゝやうである。しかも偶々マツジニの勧誘に動かされ、一時、協會に加入を肯んじたのは、國運挽回の方策に焦慮してゐたが爲であらう。

- (1) Ludwig Kossuth, Dictator v. Ungarn als Staatsmann und Redner, nebst seinen fünf bedeutendsten Reden. S. 3.
- (2) Ditto. S. 43.
- (3) Heinrich v. Treitschke: Deutsche Geschichte im 19ten Jahrhundert vier Theil. S. 714.
- (4) Ludwig Kossuth, Dictator v. Ungarn——. S. 22.
- (5) Ditto. S. 24.
- (6) H. v. Treitschke: Deutsche Geschichte im 19ten Jahrhundert. S. 714.
- (7) Ludwig Kossuth, Dictator v. Ungarn——. S. 39.
- (8) Memories of my Exile. by Louis Kossuth—Preface. p. V.
- (9) Aus meinen Erinnerungen von Georg Klapka.—S. 218.
- (10) Ditto. S. 218.
- (11) Ditto, S. 219.

四、コッスートの政治的思想 其の二

所謂十九世紀に於ける時代精神なるものを観るに、一面に於て民族自由主義の偉大なる努力を以て昂漲せると同時に、一面に於ては啓蒙思潮や尙古主義に胚胎せる世界主義の盛んなる勢を以て横溢するを見るのである。

彼の伊太利の志士マツジニはその一八〇五年より一八七二年に渉る全生涯を通じて、此の世界主義の爲め、換言すれば該主義に立脚せる自由、共和の完成の爲め粉骨碎身を惜まなかつた。

マツジニの壯圖が、夙に成らずして本國を脱走するや、先づ佛に奔つてマルセーユに至り、所謂、

① 青年伊太利黨 (La giovane Europa) なる結社を組織し、機を窺ひて伊の共和的統一を大成しやうと企てたのである。良がて一八九四年彼れは瑞西のベルンに至つて『青年歐羅巴』^② : (Der Junge Europa) なる結社を組織し、これに加盟せる諸國民は、自由、平等、人道の三主義に依つて、夫々自國を統一し、かくして成立せる諸統一國家を、更に打つて一丸となし、『共和的聯合』なる一箇の統制の下に置かうと企てたのである。

爾後マツジニは幾度か革命を本國に策して成らず、英京ロンドンに亡命すること兩度 (一八三七一—一八四〇) に及んだ。彼れが二度目のロンドン滯留に際し、圖らずも匈牙利亡命の志士ゲオルグ・クラブカと會見し、歐洲の時事を談じたことは既に前章に於て之を述べたが、其の際マツジニは、

『伊太利の解放に努力するに止まらず、尙ほ歐洲の解放、進んでは凡ゆる諸被壓迫民族の解放に努むることは現下の急務である』云々、と論じた。以て彼れマツジニの懷抱せる世界主義の一端を想見すべきでは無からうか。

一面此くの如く世界主義的潮流の盛なると共に、他方、民族自由主義の旺盛にして匈牙利にも其の發現を見るに至つた事は既に本論の冒頭にも概論せるが如くである。

蓋し十九世紀を風靡せる理想主義の波動は匈牙利をも震撼し、本來の國語たるマジャール語の研究は鬱然として起り、劇曲、史詩、抒情詩も、此のマジャール語を以て物せらるゝに至り、^④ ミカエル・ヅ

エレンスマルチ (Michael Vorosmarthy) (一八〇〇—一八五五) の如き豊麗の詞藻を以て戀愛を謳ひ、戦詩を序すると同時に、ミクロス・ヨージカ (Josika Miklos) (一七九六—一八六五) の如きは雄麗の筆を呵して小説、稗史を物し、只嘗に祖國精神の涵養に努め、民族精神の隆昌を促すことになつた。さればヴェレンスマルチやヨージカと殆ど時を同じうして世に出でた彼れコツストが理想主義に出でた祖國精神、換言すれば民族自由主義の感化を蒙らざる筈は無い。

とは云へ、かゝる民族自由主義の強き現はれ、即ち埃國との絶對分離を主張せんとする精神が、政界活動の當初よりして、彼れコツストの政治的全思想を支配せるものとは容易く認むることが出来ぬ。

由來マジヤール民族は其の建國の當初よりして、ハプスブルグ王朝の支配を受くるに至るまで、王政主義的の訓練に慣らされ、極めて保守主義の傾向を辿りつゝあつたのは既に前に述べた通りである。従て既に前章クラブカとマツジニの會談に關しても述べた通り、事實マジヤール族は最も非革命的の傾向を帯びてゐたやうである。後暫らくコツストがマツジニの計畫せる革命協會に關與してゐたのは、決して衷心から其の主義に賛同してゐたと云ふやうな譯では無く、寧ろ只管國勢の挽回を計らんと焦慮してゐたが爲であらう。

従て一八四八年三月彼れコツストがバツチャニーニ革新黨内閣の藏相として其の竦腕を振はんとせ

る際も決して早急、塙國から分離して、民族自由主義を一舉に達成せんとしたのでは無い。寧ろ塙帝
 匈王 (Kaiserkrönig) たるフェルヂナンド一世に對し、單に匈國の責任内閣の峙立を要請したに過ぎぬ。
 爲に同年四月フェルヂナンド一世が (一) 直接選舉 (二) 夫役の廢止 (三) 出版の自由是等を許容するに及
 んでは、ユツスート一派の革新黨も大體に於てフェルヂナンドの意のあるところを承認するに至つた
 のである。

事情此くの如くであるから、一八四八年七月、ユツスートが匈國議會の壇上に立つて、塙國の煽動
 に乗せられたクロアチヤやセルビヤの峰起に對し、慷慨悲憤の演説を試みた其の中にも、

『諸君は、國民が、議會の召集を必要とする現下非常の大勢を適當に判斷し、王冠の防禦のため、議
 會の自由及び獨立の爲め、大なる犠牲を將來することに決意せる旨を宣明せられよ。』と云ふてゐるの
 は、塙國の爲政者を恨むるにも係はらず、尙ほ且つ王冠と絶縁を期するに非ざることを見るべきであ
 る。

尙ほ一八四八年九月四日のユツスートの演説を見るに、

『敢へて云ふ。吾人は陛下に對し、陛下自ら匈國に來つて次の如く宣明せられんことを請へり。――
 陛下は法律及び憲法の維持の爲め、將又、國民の權利、王位の存立と密接なる關係を有する吾人の權
 利の擁護の爲め、滯留助力の勞を致さんが爲め來れりと。』かくの如く宣明してゐるのは、匈國民の權

利の自由の著しく王室に倚賴することあるを公言せるもので、強ち王室との關係を絶離せんとするもので無いことが了かる。

而かもかゝるコツストの態度が俄然として尖銳化し、斷然埃國との分離を主張し、民族自由の主義に基いて別個、マジヤール中心の獨立國を建設せんとするに至つたのは、埃國の陰に陽にクロアチヤを煽動してマジヤールに對抗せしむる其の政策に何等の緩和を見るに至らなかつたからである。

蓋しクロアチヤ(スラ)は埃太利なる匈牙利の西南部に當り、ドナウの支流たるドラウ(Drave)ザール(Save)の兩大河が、其の管内を貫流し、河岸の沃野には葡萄、柑橘の類を産し、山地には松、ぶな、栗の良材を出し、山間の牧場には豚を畜ふ。特に匈牙利唯一の良港として誇り得るフィウメはアドリヤ海に臨めるクロアチヤの海岸に位する。要するにクロアチヤは政治的に經濟的に匈牙利の重要な一州であつて匈國にして之を抛棄せんことは到底なし得ざるところである。

ところが十九世紀に於ける民族主義の勃興と共にロシヤを中心とする所謂總スラヴ主義なるものが勃興し、此の總スラヴ主義の前衛としてイリリヤ主義(Illyrismus)なるものが起つて來た。こはクロアチヤを中樞としスロヴエーヌ人(Slovenen)、ダルマチヤ人(Dalmatiner)等即ち埃太利領内の南スラヴ系の諸地方を統一して、イリリヤ國なる獨立國を造らうとする一主義であつて、此の主義の宣傳機關紙として「イリリヤ主義」なるものも起つた。かくてクロアチヤは當然、匈牙利の内部にあつて獨立

自由を要求する最も有力な少数民族とはなつた。そして一八四三年代マジヤール民族主義が擡頭して議會の通用語としてマジヤール語を用ひさせやうと計るや、同じき議會に代議權を有するクロアチヤの烈しき反對となり、マジヤール對クロアチヤの兩民族の争は愈々以て峻酷となるに至つた。

かくて塙國は陰に陽にクロアチヤ人を煽動して匈牙利人の民族自由運動に當らしむることゝなつた。殊に匈牙利革新黨内閣の讓歩的の態度にも係はらず、塙國の煽動は愈々其の陰險を極め、一旦匈牙利政府に依つて其の職を廢められた反マジヤール主義のクロアチヤ貴族エルラチ (Tellich) を太守職 (Gau) に復し、――太守の任命權は正式に云へばオーストリアの手にあつたのである。――百方援助を與へて匈牙利を攻撃することにした。

是に於てユツスートの心奥に潜める民族自由主義は強烈の勢を以て其の姿を現じ來つた。クロアチヤに對する深酷なる憎惡と共に、塙太利に對する絶對分離の主張は隆んな勢を以て活躍し來るに至つた。加ふるにマジヤール族の特質たる偏執的排他的の性向は彌々以てユツスートの排塙運動又クロアチヤ強壓運動を盛ならしめ、更に熱烈火の如き感受性、熾烈なるカルザイン派的正義觀念等相依り相俟つて、堂々其の目的に猛進せしむるに至つたのである。

實にやユツスートの回想録序文に。

⑤ 「匈牙利の獨立は街壘ベリカトの背後に獲得さるべき事柄では無く、單なる國內の蜂起でも無い。而かも大規

模に行はれたる戦であつて大きな對外戦とも言ふべきものである云々。此くの如く云ふてゐるのは要するに當時コツスト等の目的が純然たる分離 (Disincorporation) 的の運動であつて極端なる排他的民族主義に立脚してゐたことが了かる。

由來クロアチヤは前にも云ふ如く政治的に經濟的に決して放棄すべからざるところであり、彼コツストも從來匈牙利政府の極力同地を懐柔せんと努めたことを舉げ、『クロアチヤに試みた我が匈牙利の政策ほど大規模の懐柔策の行はれたことは無い』『クロアチヤ人は其の公の生活に於て自國語を公然語り得べき全權を有してゐた』『地方議會は彼等クロアチヤ人の市民權を決して狭むること無く却て之を擴大するに至つた。』云々と述べてゐるので、コツスト等の當初の期望も大體に於て想見することが出来る。

しかし總スラヴ主義の前衛を以て任ずるクロアチヤ人の希望は、決して單なる自由の獲得では無い。埃匈國から絶對の獨立を得るか、或は夫れに近きものを得ねば、決して満足することは無いのである。殊にクロアチヤが陰に埃國の援助を蒙るやうになつてからは、愈々以て匈國に對する侮蔑の傾向が加はり來つた。流石のコツストも遂に斷然、同州の強壓を敢行せねばならぬ破目に陥つたのである。

が、此の際、若しコツストにして其の多血性的な感情に拘はれず、偏執的の排他的性狀に制せられず、正確な理性の判斷に立つ民族主義者であつたなら、必ずや、尙ほ最後の一考を試みたことであ

らう。

即ち政治的に、經濟的に、有利な此のクロアチヤを失はざるが爲、更に又、クロアチヤをして猾壞の援助と、スラヴの本宗ロシアの後援を得て蜂起せしむる禍害を除くが爲め、極めて有利なる考察に達し得たであらう。

即ち此の際、匈牙利の執る可き唯一の方法とは他では無い。塙(匈)國內の全スラヴ民族・獨逸民族・及びマジヤール民族の所謂三元帝國の組織を提唱し、スラヴの代表たるクロアート人と相提携して以て塙國の獨逸民族に迫るにある。

番此の際に憂ふべきはクロアート人に對する、マジヤール人の嫌隙の豫想外に強烈なにある。狂熱的の憤懣の容易に鎮定し得ざるにある。とは言へ、コッスートの聲望を以て、堂々の打算的理論に訴へ、國民を説くに至つたなら、必しも其の効果無きを保せぬであらう。クロアチヤ族のマジヤール族に對する嫌隙は是れ又、相當強硬なものであつたであらうが、塙國に對しても、必しも甚深の同情を有してゐたと云ふ譯では無い。彼のトライチケも其の著十九世紀獨逸史に於て、クロアチヤ人はハプスブルの帝室に半ばの同情を注げるに過ぎぬと言ふた位であつて匈牙利側で同じく打算的の理論に訴へ其の奮起を促したなら必しも妥協の効果の皆無なるべきを斷すべきでは無い。

かくして、マジヤール、スラヴの兩民族が提携して、塙のドイツ民族に對し三元帝國創立の提議を

なし。若し奥國にして應ずれば、平和の間にスラヴ、マジヤール兩民族の獨立的希望は達成さるべく更にまた諸民族間の融和に依つて、相互經濟上の利權をも獲得することが出来る。若し不幸にして奥國側の拒絶と反撃に逢ふたなら、スラヴとマジヤールは斷然其の兵を合せ、スラヴの本宗ロシヤを以て後援となし、堂々雌雄を奥國の獨逸民族に對して争ふべきであらう。若し夫れ三元帝國成立の曉、スラヴの勃興を憂へねばならぬにせよ、これが對策は將來に於て之を攻究することが出来る。時恰も獨逸ではフランクフルト・アム・アインに獨逸帝國議會の開かるゝものがあり、統一問題に就いて幾多の紛擾を重ねつゝあつた。佛蘭西でも亦ルイ・ナポレオン(後の所謂ナポレオン三世)が方に政界の上位に出でんとして上下頓に活氣を加へつゝあつた。ナポレオンにして若し出でなば、彼れの主義主張の事前、民族主義に力を惜まざるべきは極めて明かに想望された。かの三元帝國主義の提唱の如きが少くもルイ・ナポレオンから若干の聲援を得べきは、容易に想像することが出来るのである。

然るに今やコツストはマジヤール民族の狂亂の渦中に投じ、奥國からの絶對の分離と、クロアチヤの徹底的彈壓を以て猛進し、其の結果、奥國をして意の如くにクロアチヤ人を操縦させ、遂にはスラヴの本宗ロシヤをしてクロアチヤや奥太利に武力的援助を行はしむに至り、一八四九年、匈牙利は三面悉く敵軍の猛襲を蒙り、大總統デクタイトコツストや將軍クラブカの奮戰努力も、其の效無く、コツスト自ら大總統の印綬を解いて、後事を其の政敵たるゲルガイ(Görgey)將軍の手に委し、熱愛せる其の

祖國に最後の訣れを告げてドナウの長流を涉り、遂にトルコの地に亡命し、孤影蕭然漂浪の途に就く之餘儀無きに至つたのである。

其の後、星霜實に十三年、一八六二年、ヨツストは飄然佛蘭西を去つて北伊太利に趣き、伊の新
 聞通信員カニニ (Canini) と會し、^⑩ 匈牙利 (マジヤール) セルヅロクロアチャ (スラヅ) 並にルーマニヤ的
 トランシルヴァニア (ラテン系) の所謂三元聯邦の峙立を畫策し、之を以て墺國に迫り、結局は四元聯
 邦國の建設を大成しやうと企てたが、其の計畫が偶々アリアンサ (Allianza) なる新聞に漏れ却て匈
 牙利の同胞さてはスラヅ系等の諸地方から多大の嘲笑を招くに至つた。畢竟、三元帝國峙立の必要に
 迫られた一八四九年に之を提唱せずして、何等焦眉の急に迫られざる一八六二年に、此くも複雑な四
 元帝國の畫策を講ずるに至つたのは確に事の先後を誤つた陋策と言はねはならぬのである。

- (1) Theodor Lindner, Weltgeschichte 9ter Bd. S. 222.
- (2) Ditto. S. 223; The Life of Mazzini, by Bolton King p. 20-34.
- (3) Aus Meinen Erinnerungen von Georg Klapka. S. 218.
- (4) Theodor Lindner: Weltgeschichte 9ter Bd. S. 297.
- (5) Ditto. S. 324.
- (6) Ludwig Kossuth, Dieten v. Ungarn. S. 22.
- (7) Ditto. S. 37.
- (8) Memories of my Exile by Louis Kossuth. preface p. 23.

(9) Ludwig Kosuth, Dictator von Ungarn. S. 9—10.

(10) Heinrich v. Treitschke: Deutsche Geschichte im 19ten Jahrhundert. 5ter Band. S. 715.

(11) Knutshull-Hugessen: The Political Evolution of the Hungarian Nation. Vol. II. p. 188—189.

五、結

要するにコッストの民族自由主義は正確穩健なる推理的打算の上に立てられたので無く、徒らに狂熱的偏執的の民族的感情に制せられ、クロアチヤてふ小數民族の處理に於て著しき失敗を招くに至つたのである。其の極、塊太利やクロアチヤを敵として邀へたるは勿論、クロアチヤの背後に活躍せる強露の精銳にも敵として對抗せねばならぬやうな破目に陥り、遂に南風競はずして當初の目的を抛擲し、海外異邦の亡命客たらねばならぬやうな事にもなつたのである。

ヨルク・フォン・ワルテンブルグの世界史概觀に依るに、凡そ歐洲の歴史に四箇の分野を劃すること^①が出来たる。其の一はスラヴ的ビザンツ的世界であつて、之れに於ては教會的國民性的傾向が排他的であり、其の結果不統一の傾向を馴致するを免がれぬ。其の二は羅馬風の舊教的世界であつて、之れにありては教會的傾向が排他的であり、其の結果同じく不統一の弊風を誘發する。其の三はアラビヤ的回教的世界であり、之れにあつては國民性的、教義的傾向が排他的であつて、其の結果は矢張不統一の弊害に墜する。最後に、其の四は所謂ゲルマン的新教的傾向であつて、之れに於ては自由なる國家組織を許し、其の國家組織が大抵の場合、聯邦的形式を具有し、一面教會及び國家の比類なき多樣

性を現出し、遠心的傾向を誘發せざるに非ざるも、却て全體の統制平和を安固ならしむるに至つてゐると、此くの如く論述してゐるのである。吾人は更にこゝに第五の世界を、歐洲の史上に想定して、假りに之をア ज्या的新教的の世界と名付け、其の國民性的教會的傾向が、遂に其の世界の壞敗を促すに至つたものと斷せざるを得ぬのである。畢竟匈牙利獨立役の失敗に終はれる一因は少くとも其の國民性的缺陷たる包容性の缺如實に此の一點にありしものと斷せざるを得ぬのである。

(1) Graf Yorck v. Wartenburg: Weltgeschichte in Umrissen. S. 129.

(完 結)